
新古事記

安楽樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新古事記

【コード】

N5002Q

【作者名】

安楽樹

【あらすじ】

異なる武道を会得した高校生たち。その手にした武具から聞こえてくる声に導かれ、辿り着いたのは何だか戦国時代のような古き日本に似た国。次第に巻き込まれていく戦によって、目の当たりにするリアルな戦場での生活。凄惨な中にも存在する日常によって、少女少女たちは自分の中の何かを求めて成長していくのだった……。

よくある異世界召喚ものの、オリジナル戦国時代設定です。

序章 零と沙波

「せいっ、せいっ！」

道場の窓から、威勢のいい掛け声が響く。その古い道場の中では、一人の少年が一心不乱に素振りをしていた。少年はまだ若い。……おそらく十七、八歳だろう。

百七十センチほどの身長にほっそりした体型。身に付けた剣道着が良く似合っていた。黒い髪は少し長めで、前髪がもう少して目に掛かりそうかというくらいだ。しかしまだその下から覗く眼差しは、この年頃にしては似つかわしくないほど強い光を放っていた。

差し込む朝日が刀身に反射して、天井を照らす。

……見た所、道場はかなり古い。しかし、今にも朽ちそうな古ぼけた建物ではなく、どことなく気品を感じさせるような古めかしく奥ゆかしい建築物だった。

窓から照らす朝日が少年の横顔を映し出す。床にもその光は反射して、早朝の心地よい爽やかさをより一層増していた。その何十畳もありそうな広さの床には、誇り一つ積もってはいない。それは、素振りの前に少年が全て雑巾がけをしていたからだ。

起き抜けの道場の掃除と素振り。……それがいつもの彼の一日の始まりだった。

質素で清潔な道着を身に纏い、既に数十回は続いている運動の疲れも感じさせず、彼はただ素振りを繰り返す。額から伝う汗が顎の先から一雫、また一雫、綺麗に磨かれた道場の床へと落下した。まるで彼以外、全て時が止まったような、そんな静寂の世界。

……そこにたった一つ、静寂を破る足音が近づいて来る。

道場の東側、差し込む朝日の中心にある横開きの扉が開いて、人影が入ってきた。閉められた扉によって逆光が遮断された時、そのシルエットが明らかになる。……そこには一人の少女がいた。

「……またそれで素振りしてるの？零^{れい}」

ゆっくりと少年に近づきながら、少女はそう呼びかける。少年は彼女に気付いているのかいないのか、まったくそちらの方を見ずに素振りを続けていた。そんな彼に少女もそれ以上は話し掛けず、少し離れた場所に座って、素振りを続ける彼をじっと見守っている。その眼差しには、存在を無視された苛立ちも込められておらず、とても暖かく穏やかな光に満ちていた。

「九十九、……百！」

刀を振り下ろした姿勢のまま、最後にそう呟くと少年は動きを止めた。大きく息を吐いた後、足元に置いてあった鞘を持ち上げ、刀をしまった。

少年の持っていた日本刀は、まだ暖かさもあり含まれていない朝の光に反射して輝いていた。それは一般的な日本刀よりも少し長い。普通の物は五十〜六十センチぐらいだが、この刀は九十センチほどもある。もちろんそれに応じた重さもあり、素振りの訓練には最適だった。

「相変わらずね」

再びそう話し掛けた少女に、少年は少し驚いて振り向いた。

その先に立っていた少年と同じ年ぐらいの制服を着た少女は、道場の入り口のすぐ横で鞆を抱えたまま少年の様子を見ていた。

身長は少年よりも十数センチほど低いだろうか。背中まで伸びた艶

のある黒髪が、道場に吹き込む風になびいて揺れる。それを見た少年は何故か唐突に、もう春が近くまで来ていると感じるのだった。

「……沙波、さなみ来てたのか」

そこで初めて少年は、沙波と呼んだ少女の存在に気付いたらしい。そのまま汗を拭きながら彼女の横まで来ると、床にばたつと横になった。

「あゝ、疲れた〜」

先ほど素振りをしていた時の真剣な表情とは打って変わり、少年の仕草は非常にくだけたものになった。それだけで、二人は親密な関係だという事が判る。ただ、その微妙な距離から、まだ想い合っている仲、というわけではないようだった。

「また真剣なんか持ち出して。お爺さんに怒られるわよ?」

沙波はそう言つて、零と呼んだ少年が手に持っている刀を見る。確かにその手には、大きな刀が握られていた。……その大きさはかなりの物であり、片手ではまず持ち上げられないような長さで重さだった。今は鞘に包まれているが、その鞘だけをとつたとしても、深みのある、渋い深緑にも藍色にも見える色の光沢が表面を彩り、多量なりとも詳しい人間であれば、さぞ名のある業物であると判つただろう。

そんな業物を床に無造作にごろりと転がし、零はそのままゴロゴロと床を転がった。そして今度はうつ伏せで止まる。

「大丈夫だって、爺さんもう諦めてるから」

悪びれもせずそういう零に、沙波は肩をすくめて見せた。確かに家の道場なのだから銃刀法違反にはならないのだろうが、それにしてもこの少年は、どこか常識が欠けている。沙波は以前から、そんな感想を抱いていた。

「お前こそ、今日の稽古はどうしたんだよ」

「へへ、今日はお休み」

沙波は照れくさそうに言うと、零から目を逸らした。……やましい事があるに違いない、と零は直感していた。沙波を見る目が細くなる。

「……どうせ自主的にだろ」

ははは……、と沙波は頭をかいた。この二人はいつも登校前に自宅で稽古をするのだ。それから沙波が零を迎えに来る、というのがいつもの日課だった。

「それより、早く行かないと学校に遅れるよ」

話を誤魔化すように、沙波は言った。確かに、もうすぐ登校時間だ。「先に行けよ」

そんな沙波に零は冷たく言い放つ。彼にとって、ちょうど今は稽古の後の心地よい休憩時間だった。それに、稽古をサボった沙波に対して少し意地悪な気持ちもある。

「ひどーい。私が登校中に変質者にも会ったらどうするのよ」

口元に握り拳を当てながら、沙波はそう言っておどけて見せる。零は寝転んだ姿勢のまま顔だけをそちらに向けた。少女に向かって、白い視線が飛ぶ。

「お前は俺が守らなくても大丈夫だろ」

実際にそうだった。零は剣道をやってはいるが、素手だったら沙波に勝てる見込みはない。彼女の家は合気道を教えており、しかも彼女自身に至っては三段なのだ。だから特に深い考えがあったわけではなく零はそう言ったのだが、彼の予想に反して、当然予想していた彼女からの文句は返って来なかった。

「……」

いつもなら、「よくそんなひどい事言えるわね！」と威勢良く怒声が返ってきたり、それが逆鱗に触れて固め技の一つや二つかけられ

る事もあるのだが、今回はどちらでもなく、彼女はただ黙ったまま俯いていた。

そしてそのまま道場を出て行くこととする。

「お、おいどうしたんだよ!？」

いつもと違うその様子に、零は慌てて飛び起きる。その拍子に、足に当たった刀がガタンと音を立てて転がった。そして、少しだけ刀身が覗く。

「……………くれるって、言ったのに……………」

沙波が小さく呟いた。しかしその声は、零には聞こえていなかった。

「おい、沙波。どうしたんだよ」

零は道場の入り口で止まっている沙波の肩を掴んで、こちらに振り向かせる。その勢いで、沙波が制服にしまっていた首飾りが服の外に零れた。シンプルな紐に、透き通った勾玉が付いている。それは、彼女の家に代々伝わる家宝だった。水晶でできているその勾玉は、透明な光で溢れていて、丁度朝日の光を吸収し、まるでそれ自体が発光しているかのような眩しさを与えていた。

振り向いた沙波の目には、うつすらと涙が滲んでいる。零はそんな彼女を見て、妙な焦りを覚えるのが判った。慌てて、それほどの事をしたかどうかと自分の言動を省みてみたが、よく判らなかった。

「何でお前……………」

零がそう言いかけた時、突然大きな違和感が二人を襲った。

『!?!?』

「……………なんだ?」

「何……………?」

その違和感は喻えようの無いものであったが、敢えて近い表現をす

るのならば、それは『引つ張られる』と言う感じだった。ただしそれは、体の中心もしくは、体の外全てへ向かつているような、現実では有り得ないような方向へ向かう引力だった。しかし彼らは、ある種の引力を確かに感じていた。

引力と共に、耐えられないほどの吐き気が襲ってきて、立っていられなくなる。零はこの違和感を憶えているのは自分だけかとも思っていたが、沙波を見ると彼女もやはり同じ感覚を憶えているようで、体がふらついていた。そして、そのままこちらに体を預けてくる。

「沙波……」

すっかりしろ、と言いたかったがうまく言葉が出ない。掠れたような声で、彼は自分に寄り掛かっている少女の名を呼んだ。……心なしか、彼女の首から下げている勾玉が明滅しているような気がする。

「零……」

零の声に彼女も答えた。目の端に、彼がさっきまで素振りをしていた刀が映る。少しだけ覗いた刀身が、彼女には何だか発光しているように見えた。

『……再び歴史は動乱の時を迎える……若き龍よ、我が呼び声に応えよ……』

どこからか、そんな声が聞こえる。彼は、これは幻聴だと思った。なぜなら、その声は彼がいつも使っているあの刀から聞こえたような気がしたからだ。

「誰だ……」

辛うじて、それだけの声が出せた。……しかし、それに答える声は無かった。どんどん体は自分の物で無くなっていく。高熱にでも浮かされているような気分だった。外はまだ早朝だと言うのに、辺りが暗くなっていく。もはや太陽の光も、道場の床も天井も見えない。

急速に闇に侵食されていく中、たった二つだけ光っている物が見えた。……それは、あの刀と勾玉だけだったのだが、もう殆ど意識を失っている二人には、その事はもはや判らなかった。

心も体も真つ暗な闇の中に沈んでいく中で、零の脳裏には、何故か小さい頃の記憶が甦ってきていた。

公園にいる、幼い女の子と男の子。

女の子は泣きじゃくり、男の子が一生懸命それをなだめている。

(……そうか、沙波はいじめられっ子だったな。昔はそれでよく泣いてたっけ。)

そんな記憶が思い出される。

「うええ〜……」

「もう泣くなよ」

「だって……」

女の子は両手でゴシゴシ目をこすっている。涙が次から次へと溢れて止まらなかった。

男の子の目が、真つ直ぐ女の子の瞳を見る。

「俺が絶対 から！」

何と言ったのか、意識が薄れてよく思い出せない。

「ほんと？」

女の子の涙は止まる。

「うん、絶対」

「約束だよ？」

「ああ、だ」

そして彼の意識は遠くなっていく。

……次に二人の目に映ったのは、地獄だった。

序章式 拳侍

「そいつは俺に向かって言ったのか？オイ？」

少し薄暗くなつた表通り。繁華街の喧騒の中で、数人の男達が睨み合っていた。

「ああ？」「なんだあ？」

片方は学生らしい出で立ち。もう片方は若いチンピラ達だった。人数は一对三。誰が見ても、明らかに険悪な雰囲気だ。

「俺に言ったのかつて聞いてんだよ！」

学生の方がもう一度言う。負けん気の強い目と、がっしりとした体格が特徴的な少年だった。その学生は高校生ぐらいで、短めの髪を立て、はだけた学ランの前からはTシャツが覗いている。そして両方の拳には、何故かバンテージを巻いていた。

「だったらどうしたよ。やんのかよ!？」

「三人相手に勝てると思つてんのか!？」

チンピラ達は、口々にそう言つて凄む。どう見ても、自分達の方が優勢だと思つているようだ。完全に相手をなめたように、無防備のまま近づいていく。

どうやら相手は学生一人。もう少し凄んで見せれば、びびって逃げるに違いないと思つているようだ。

「言つとくが、俺は負けんのが大っ嫌いだからな」

そんなチンピラ達に一步も引かず、学生は詰め寄る。その鋭い目つきは、獲物を捉えたまま動かなかった。そしてただ、拳を堅く握る。

(三対一か……)

拳侍の脳裏を、一抹の不安がよぎる。

しかしそんな考えはすぐに、この喧嘩に勝つ方法へと切り替わった。目まぐるしく、彼の頭の中を周辺の地形、人込み具合、使えそうな道具などが浮かんでくる。……こういつた状況は初めてではない。

岩浪拳侍。それが彼の名前だった。彼の尊敬する祖父に付けてもらったこの名前を、汚すわけにはいかない。この勝負、決して負けるわけにはいかないのだ。拳侍はそう考えていた。

きつと彼の友人に、彼はどういう性格かと聞いたら、必ずこう答えるだろう。『馬鹿がつくほどの負けず嫌い』と。現在の状況においてさえ、彼は真剣に勝つことを考えていた。

「だからなんだってんだよこのガキ。いい加減にしねえとマジでやつちまうぞゴルア？」

怖さを通り越して、既に面白い部類に入りそうな表情をしながら、チンピラのマサ(仮)は拳侍に詰め寄ってきた。

二人の間の距離は、およそ10cmほどだ。……何故チンピラ達は、必要以上に接近してくるのだろうか。そんなどうでもいい考えを振り払い、拳侍は呼吸を整える。シュツと小さく息を吸った後、行動を開始した。

「あがつ！」

マサ(仮)の顔が、大きく仰け反る。ノーモーションの拳侍のアッ

パーが顎を直撃したのだ。同時に、右足を相手の向こう脛に打ち込む。

「イデッ！」

相手が崩れ落ちるのを待たずして、拳侍は走り出した。もちろん後ろにだ。まだ時間が若干早いせいか、通りの人影はまばらだった。走るのにあまり苦にはならない。

チンピラたちはしばし呆気にとられていたが、すぐに我に返ると、自分達の面子に賭けて拳侍を逃がすまいと追撃を開始した。

「てめえこのっ！」

しかしチンピラ三人組のうち、マサ（仮）だけはすぐに置き去りにされてしまう。よく見ると、ひよこひよここと左足を引きずっていた……どうやらさっきの蹴りが効いているらしい。弁慶ですら耐えられないのに、そこらのチンピラが耐えられるはずも無いだろう。もちろん、それを見越しての拳侍の作戦だった。

「あ、兄貴っ！」

それを見た他の二人は仇を取ろうと、より血眼になって追いかけてくる。それを背中で感じながら、拳侍は頃合いを計って路地を曲がった。繁華街とはいえ、大通りを曲がってしまえば、もう薄暗い路地だ。

「おい待てっ！」

当然、チンピラたちはそれを追いかけて曲がった。何も考えていない。……何も考えていないので、吹っ飛んだ。

「どあつ！」

拳侍は曲がり角で待ち伏せしていたのだ。そして相手が曲がってくるタイミングを計って最初の男の足を払った。前のめりに倒れこんだ相手に追い討ちをかけるように、体重を乗せた蹴りを、その背中に向けて振り下ろした。……チンピラのジョージ（仮）は悶絶した。道路を転がりながら痛みをこらえ、げえええつと胃液を吐いている。通り掛かりの人達は、それを横目で見ながらも、出来るだけ関わらないようにしようと、足早に過ぎ去っていった。

「兄貴いつ！」

一人取り残されて最後に到着したチンピラ、ノリ（仮）は兄貴の容態を気にしつつも、バンテージを巻いた学生に注意を払った。しかし、もう不意打ちはどこからも来る事は無く、当の学生は路地の少し奥でじつと佇んでいた。その向こうは壁だ。

ノリは、もう卑怯な手は無いはずだと思いながらも、じりじりと拳侍に近づいていった。立て続けに二人も兄貴分がやられたのだ。これでもやり返さなかったら自分の面子に関わる。それ以上に、後で兄貴達に何をされるか判らなかった。様々な感情が入り混じりながらも、確実に怒りが沸いてきて、散々痛めつけてやらなければ気が済まないほど、彼の腹わたは煮えくり返っていた。

「もう逃げ場は無いぞ、くそガキ」

「……」

拳侍はただ黙っている。それを恐怖と見たのか、ノリはやや余裕を持って構える。……普通に考えれば、こんな学生に自分が負けるわけがないのだ。

「どうした？もう何の策も無いのか？」
「……」

馬鹿にするように言った言葉に、やはり拳侍の反応はない。その沈黙が不気味で、ノリは近づくタイミングを失っていた。額に汗が浮かぶ。兄貴が来るまで待とうか、という考えが浮かびかけた時、相手は口を開いた。

「かかってこないのか？」

その余裕に満ちた台詞にとうとうノリの堪忍袋は耐えきれず、咆哮と共に拳侍へと襲い掛かった。顔面目掛けて右拳が走る。っ！が、次の瞬間、顔面に拳がめり込んでいたのは、彼の方だった。……一瞬何が起きたのか判らない。数秒遅れてついて来た記憶で、自分の拳が相手の左手によって受け流され、逆にカウンターを食らったと言う事が判った。

(空手……？)

崩れ落ちる前に、それだけが思い浮かんだ。そしてすぐに彼の意識は途絶える。這いつくばった二人のチンピラに目もくれず、拳侍は路地裏を出て行った。

拳侍はゆっくりりさっきの場所まで歩いて戻った。すると、最初に殴られたチンピラのマサが、携帯電話で一生懸命子分たちに連絡をとろうとしている所だった。

何気ない足取りで拳侍が近づいていくと、彼はギョツとしてこつちを向いた。明らかに何の傷も受けていない拳侍を見て、彼の怯えの表情が簡単に見て取れる。

待てよ、ただ逃げ切ってきただけかも……。でも、さっきから電話が繋がらないのは……？そんな考えがぐるぐると、マサの頭を巡る。しかしそこはさすがチンピラ。表情ほど簡単に怯えを見せないのは彼らの専売特許だった。

拳侍が目の前まで来ると、マサはうめくように言う。

「て、てめえ卑怯だぞ……」

「何言ってるんだ、三対一だぞ。どっちが卑怯だよ」

悪びれないその言葉を聞いて、マサの脳裏に一瞬ある記憶が甦った。

「ま、……まさかお前が、バンテージ学生……!?!」

「うっせえな、その名前で呼ぶんじゃないよ」

『バンテージ学生』……、チンピラ仲間で噂されている通称だった。関わったら最後、どんな手を使っても勝てない。勝利への執着は警察よりも性質が悪い。関わらない方が身の為だという話だ。しかも、その背後にはとんでもない権力が潜んでいると言う……。

そう言えば、いつも学ランにTシャツを着ていると言う話を聞いた事がある。まさか本当に存在するとは……。都市伝説じゃなかったのか……。

マサ（仮）は、急に焦り始めた。……な、何とかこの場を切り抜けなくては……。

「わ、悪かった。まさかお前がそうだって知ってたらこんなことしなかったよ!」

「もうおせえよ」

拳侍は冷たくそれだけ言うと、拳を堅く握る。しかしその瞬間、言いようの無い違和感が彼を襲った。まるで全身から重力が消えてし

まったような、しかしその代わりに体の中心に向かって落ちていくような感覚。

目の前の男が、徐々に霞んでいく。いや、男だけでなく周囲全てのものが霞んでいた。

(やばいか……)

微かにそんな事を考える。薄れていく意識の中で、彼の右手の中指の辺りだけが光っているのが見えた。そこには、彼が祖父から貰った指輪をはめていた。

彼は目の前も頭の中も完全に霞がかかってしまうその最後まで、この喧嘩に勝てるかどうか、そんな事を考えていたのだった……。

程なくして、彼は目を覚ます。……体に微かな衝撃があつたのだ。目を覚ました彼を、何だか見覚えのあるような三人の人物たちが見下ろしていた。

「オイ、こんなところで寝てるんじゃないやねえよ、たわけが」

遠慮なく、倒れている彼の体に蹴りが放たれる。それを受けて、彼の中でまた何か湧き上がってくるのを感じた。熱い、燃えるような何かだ。

彼はゆっくりと身を起こそうとする。何だか体がふらついていたり、全く変わってしまった周囲の状況がいまいち判らなかったが、それでももちろん彼はこう返した。

「オイ、そいつは俺に向かって言ったのか？」

序章参 双葉

「ゴホッ、ゴホッ」

何て誇りっぽい部屋なんだろう。

彼女はさつきからずっと咳き込みながら掃除をしていた。彼女の名は双葉。八千草双葉と言う。

八千草流弓道場の娘であり、双子の姉でもあった。……ちなみにもう一人の、妹の方は一葉と言う。二人共知らなかったが、近所では評判の器量の良い姉妹として、この凧之原町二丁目やの間では密かに人気があった。

八千草家には彼女たちの他に子宝に恵まれなかったため、父、八千草樹いっさきはこの二人をとても可愛がっていた。それは正に目の中に入れても痛くない程といっても過言ではなく、その為に近所でも人気の姉妹と噂されていたのだが、当の本人たちにとっては残念ながら、その天敵の存在のために、今までに悪い虫に寄り付かれるような事は無かった。

その厳格な父の八千草家の掟により、門限は七時と定められていて彼女らはほとんどカラオケやカフェで喋って時間を過ごす、と言った良くある女子高生の放課後を過ごす事は無かった。

彼女たちはいつもクラスメイト達の浮いた話をいつも羨ましがって聞いており、いつも姉妹の間で持ち出されるのは、早く自立して家を出て、素敵な人を探したいね……という話題だった。

しかしこの話題は、この後彼女に起こる出来事によって、全くの余談となってしまうのだが。

「あゝあ、やっぱり買い物にしたら良かったかな」

埃を吸わないように、白い三角巾をマスク代わりにしながら、双葉はぼやいた。

松山に弓道の師範として出稽古に行っている父から頼まれた仕事は、買物か掃除の二択だった。寒がりの双葉にとって、この二月のくそ寒い中に外を出歩くなどというのは拷問に等しい選択だった。

父から留守中の仕事を頼まれた時も、「一葉、買いたい物あるって言ってたよね？ついでに買ってくれば？」などと言うと、物分かりのいい妹は「……そう？じゃありがたいくらいお言葉に甘えて、ついでに行つて来ようかな？」と、承諾してくれたのだった。

そして見事双葉は、裏庭にある古い蔵の清掃権を獲得していた。妹の一葉は先程、たまの外出に少しでも出会いの可能性を高めるため、精一杯のおめかしをして出掛けていった所だ。

……しかし、いざ実際に掃除を始めると、あまりの荷物の量とそれ以上の埃の量に、双葉は喘息寸前だった。

まだ半分も終わっていなかったが、早くも「休憩、休憩」と、外に出る。

「うわっ何これさぶっ！凍るって」

双葉は外のアマリの寒さに、慌てて蔵の中に戻る。

(確か、近いうちに雪が降るって言ってたっけ……)

雪が降るのは許せるが、これ以上寒くなるのは勘弁して欲しかった。意外にも、外に比べたらまだこの蔵の中の方が寒くなかった。……古い蔵には、まるで何十年も前から変わっていなかったかのように、空気が溜まっている。

仕方なく、双葉はまた両手を動かし始めた。

「まあ、どーせ買い物に行ってもそれはそれで文句言っただらうしな〜」

どうしても孤独な単調作業になると、独り言が増えてしまう。鼻歌でも歌いながらやるうかとも思ったが、何気なく頭に浮かんでくるメロディといえば、今の所何も無かった。

「……………それにしてもお父さんてば、何でせつかくの休みの日なのに掃除なんてしなくちゃいけないのよ全く……………」

文句は言ってみたものの、例えこの掃除などという気が乗らない出来事が無かったとしても、双葉に入っている予定など何も無い。友達はいつもみんな、休みの日には「ごめん、デートだから……………」なんて言っただけなんだ。

……………結局の所、双葉には同じ境遇の一葉と過ごすしかないのが毎週の予定だった。

「ただいまーっ」

(……………あの声は一葉？ちょっと早過ぎじゃない？)

双葉はそう思ったが、実際の所、商店街まで出て帰ってくるのには少し遅かったほどの時間が経っていた。……………つまり、双葉の方が時間が掛かり過ぎていたのだ。得てして、掃除というのはそういうものである。

ともかく、帰ってきたのなら丁度いい。この、途方に暮れるほどの好敵手を相手に、ようやく強力な助っ人が現れたのだ。これを放っておく手は無い。

「おかえりーっ！」

やや下心がこもったが、それが表には現れないように双葉は返事をした。そして蔵を出ると、うまい誘いの口実を考えながらトタトタと玄関まで走る。

「おかえりー、あのさー葉……」

「あ、お姉ちゃん」

「ど、どうも。お邪魔してます」

「!?!」

……その時の双葉の心境を表すとしたら、『ガガン！』という音が一番似合っただろうか。

玄関で双葉を出迎えたのは、よく知っている妹一葉と、あまり知らない隣のクラスの確か……葎原とか言う同級生だった。双葉の手から、持っていたハタキが音を立てて落ちる。

「あ……あ、あ……」

「あの、お姉ちゃん？知ってるよね？葎原君。……丁度買い物帰りに会って、荷物運ぶの手伝ってくれたんだ。折角だからお茶でもって思っ」

「あ、俺すぐ帰るから」

「いいよいいよ。今日お父さんいないし」

「……そうなの？」

あまりの衝撃に、状態変化の特殊効果の付随した攻撃を受けたように全身固まってしまっている双葉をよそに、何だか初めて家に遊びに来たカップルのような二人の会話は続けられている。

勿論、一葉が家に男の子を連れてくるなんて初めての出来事であり、ここに彼女たちの父親がいれば『八千草家始まって以来の大事件』

になることは間違いなかった。

(おのれ、裏切り者……！)

双葉は心の中で、実の妹を般若のように睨みつけていた。そしてなんとか、にこやかな表情のまま、「ど、どうぞごゆっくり……」とだけ何とか口にすると、ハタキを拾ってジリジリと玄関から後ずさる。そのまま玄関から死角になる所まで隠れると、固まった表情のまま父の寝室へと向かった。

今時珍しい木造一階建ての八千草家は、もちろんどの部屋も畳だった。昔双葉たちが小さい頃に「フローリングの部屋がいい」と父にねだっても、すぐさまその願いは却下されるほど、隅から隅まで和風な作りだった。

廊下の突き当たりを右に曲がり、左側の襖を開けた父の寝室は、約十四畳ほどの広さがあった。置いてある家具類は最小限の物しかなく、何となく寒さを感じさせるほどの空間の奥に、古めかしい仏壇が置いてある。

双葉はそろそろその仏壇の前まで進むと、床に膝を着いた。

「母さん、一葉が男を連れてきた……」

正面の額に飾ってあったのは、双葉と一葉の母、……そして父、樹の妻”八千草香織”の遺影だった。二人が小さい頃、母は病気を患って他界している。それからは、姉妹、家族の間で何かあった時は、母親に報告をするのが八千草家の習慣だった。

「……はあ、どうすればいいんでしょうか。姉の立場が全くありません」

双葉は寂しそうに呟くと、がっくりと肩を落とした。
唯一頭の中を巡るのは、”先を越された……”という思いだった。

(それにしても、いつの間に……。あんな男友達がいるなんて聞いてない。……そう言えば、前に一度か二度名前を聞いたことがあるような……)

考えてみれば、そんな気もしてきたが、あの一葉がそんなまさか……
…と思っていたため、こんな事は全く予想もしていなかった。

しかし、玄関での二人を見ていた時に、双葉は微妙なぎこちなさを感じていた。

(まるであればよくある、“友達以上、恋人未満”のような……あ
い、いや！まさかそんな、あの一葉に限って……)

双葉は一人で力一杯首を横に振りながら、そんな悪い想像をかき消す。

(いやでも、そう悔っていたから案の定、この通りの結果になったんだし……)

何だか悩みだか後悔だかよく判らないものがずっと頭をグルグルと巡っていたため、一度気分を切り替えようと、双葉は仏壇の正面に飾ってある写真を見つめた。

……目の前にはモノトーンに彩られた彼女たちの母親が、幼い頃から変わらぬ笑顔で自分を見守っている。その安らぎに満ちた表情は、いつも彼女の心を落ち着かせてくれるのだった。

(一体どんな人生を送れば、こんなにも幸せそうな表情をする事ができるんだろう?)

……双葉はそう考える事がある。そして、まだ自分にはこんな表情はできないかな……とも。

しばらくの間、遺影を見つめた後、きちんと正座をして両手を合わせる。いつもしているように軽くお参りをすると、双葉は立ち上がった。

「一葉の奴、お父さんがいないのをいい事に抜け駆けしやがって……！」

まださっきの出来事が納得できないらしい。……彼女の父親が聞いたら、仏壇に向かって三日は愚痴と酒量が増えそうな台詞を口にした。双葉はその部屋を後にした。

襖を元通りに閉めると、また先ほど掃除の途中だった蔵へと向かう。もう既に、掃除の続きをする気はほとんど無くなっていた。

（……それよりもお父さんがいない今、私が代わりに一葉に悪い虫が見つからないように見張っておかないと！）

何故か双葉は一人、妙な使命感に燃えていた。

外の寒さも既に忘れ、掃除の途中だった蔵に戻ると、さっきまでに外に出しておいた荷物をしまい始める。

（とりあえずこれだけしまっておけば、今日の所はよしとしよう）

彼女の思考はもう自分の部屋へと飛んでいた。

きつと隣の自分の部屋からならば、会話も聞こえるに違いない。

（古い木造建築である八千草家に、プライバシーというものは無いのだフッフ）

双葉は一人、怪しく笑う。

(…………でも、もし変な事が起きちゃったらどうしよう……。ん？変な事って何だ…………?)

ようやくそこまで双葉の思考が暴走した時に、彼女の目に気になる物が映った。…………それは、蔵の片隅に置いてあった細長い包みまるで弓矢でもしまっておくような物 であつた。

「うわ、古そうな包み…………」

これでも一応は弓道初段を持っている双葉だ、その包みに興味はあつた。

…………ちなみに初段とは言つても、実際には彼女とその双子の妹の實力はそれ以上である事は間違い無い。

高校に入ってから昇段試験を受けていないので、初段のまま滞っているが、毎日の稽古を欠かしたことは無いのだ。というよりも、父が欠かさせてくれない。

別段弓道が嫌いと言うわけではないが、今は昇段試験を受けるよりももっと他の事をしたいと、双葉と一葉は常々思っていた。

『…………双葉…………』

「え？」

双葉は突然、誰かの呼ぶ声を聞いた。

辺りを見回してみるが、勿論誰もいない。と言うよりも、今の声はまるで自分の声の頭の中で聞こえるように響いてきたのだ。そのおかしな感覚に、双葉は当惑した。

「……………」
「……………」
『……………双葉……………』

また聞こえる。

もう一度その声の主を尋ねようと双葉が口を開きかけた時、彼女は急に違和感に覆われた。

段々と意識が薄らいでいく感覚。それは何だか眠る直前の無意識な状態に似ていた。

徐々に現実感が薄れ、瞼が重くなっていく。閉じる直前の彼女の目に、ぼんやりと光る先ほどの包みが映っていた。

「あ……………れ？」

全身から力が抜けていく。

双葉は心地良い感覚に包まれていた。……………何だか、ほんのりと暖かい。彼女の意識が夢のように真つ白な幸福感に消えていく寸前、さつき聞こえた声が、何となく彼女の母親に似ていたような気がした。

「……………お姉ちゃん？……………葎原君もう帰ったよ〜」

遠くから、双葉とよく似た声が聞こえてきた。その声の持ち主は、彼女の双子の妹、一葉だ。

幸いにも、悪い虫がつかないようにと考えていた双葉の心配は無用だった。先ほど部屋に上がった葎原君は、緊張のあまり、出されたアールグレイティーを一杯飲んだのみで、早々に八千草家を後にした。

……………一葉は少々物足りなさを感じながらも彼を玄関まで見送った後に、古い蔵を相手に悪戦苦闘しているであろう姉を手伝おうと裏庭に駆け付けたのだった。

サンダル姿で蔵の前に訪れた一葉は、蔵の前の光景を見て半ば呆れた。

……これならば、掃除をしない方がまだマシだったかもしれない。しかし買い物も終わり、せっかくの休日の予定もついさっき無くなってしまうた今となつては、姉といつも通りの休日を過ごすのもいいかも知れない、と彼女は思った。

「……またこんなに物置散らかして！お姉ちゃん！」

軽く怒つたような表情で、一葉は蔵の中を覗き込む。……しかし、そこには誰もいない。

ただそこには、掃除の途中で乱雑に投げ出された古い荷物の山と、使いかけのハタキだけがぽつんと取り残されていた。

「お姉ちゃん？どこ行つたの？」

双子の妹の言葉だけが、空になつた蔵の中に響く。

だが、それはひんやりとした室内に残ることなく、すぐに落ちて消えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5002q/>

新古事記

2011年4月22日19時54分発行